

センターだより

第90号

発行
平成31年1月



文化祭

目次

- 新年を迎えて 1
- 第38回大分国際車いすマラソン大会 2
- 第27回文化祭 3
- 蛸の交歓会（答礼訪問） 3
- 診療室より～健康管理について2～ 4
- 2018年度 ツインバスケットボール かぼすカップ・九州連盟リーグ戦 5
- 別府市立南立石小学校児童に対する福祉体験学習について 5
- 作品展 6
- 障害者週間記念講演開催 6
- 終了者の状況、利用者募集のご案内 裏表紙

指定障害者支援施設

国立障害者リハビリテーションセンター自立支援局
別府重度障害者センター



新年を迎えて

所長 三好 尉史

新年あけましておめでとうございます。皆様におかれましてはつつがなく新しい年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

また、日頃から関係機関、地域の皆様から温かいご支援ご協力を賜り、心から感謝申し上げます。

さて、本年4月末をもって平成の時代が終わりを迎えます。平成の約30年あまりについて、本センターに関連することを振り返ってみますと、この間、制度等様々な変化がありました。まず平成15年の支援費制度への移行により、行政がサービスの内容を決定する「措置制度」から、障害のある方が自らサービスを選択し利用する「利用契約制度」に変わりました。あわせて苦情解決制度の仕組みが整備されるとともに、第三者機関によるサービス評価により、サービス内容の透明性と質の向上が求められるようになりました。

次の大きな変化は、平成18年の障害者自立支援法の施行です。国立施設である当センターも、自立訓練（機能訓練）及び施設入所支援を行う指定障害者支援施設として、大分県から指定を受け、定員も100名から70名に変更しました。

そして、平成22年4月には、国立施設の機能一元化を図るために、地方センター組織が国立障害者リハビリテーションセンター（埼玉県所沢市）に統合され、一体的な事業運営を行うことになり、名称も国立障害者リハビリテーションセンター自立支援局別府重度障害者センターに変更されました。

一方、当センターが一貫して変わらずその役割を担っていることがあります。頸髄損傷の方へのサービスの提供です。

平成元年度から平成30年12月31日までの間、851名の方が利用開始されましたが、そのうち、頸髄損傷の方は663名にものぼり、利用者の約77.9%を占めます。

国立施設として、施設内設備の充実、医療や介護体制の確保、専門職の配置等を図り、民間では対応が難しいと言われている頸髄損傷の方への拠点機関としての役割・機能を果たしてきたと言えます。当センターの訓練を終了された方々の中には、それぞれの地域で仕事やスポーツの面等でご活躍されている方もたくさんいらっしゃいます。

本年5月に平成から新元号へ変わりますが、これからも頸髄損傷の方へ質の高いサービスを提供する拠点機関としての役割・機能を担いつつ、職員一人一人が当センターに求められている役割や重点的に取り組むべき事業についてあらためて自覚し、情報発信の更なる強化や新たなニーズへの対応にも積極的に取り組んでいきたいと考えております。

では、最後になりますが、本年も皆様にとってより良き年になりますことを祈念し新年のご挨拶とさせていただきます。

第38回大分国際車いすマラソン大会

木畑 聡

「今年は大丈夫ですかね」。大会までの1ヶ月間、利用者・職員の間でよく交わされた会話です。台風による中止となったまぼろしの第37回大会から1年…。

今大会は、11月18日（日）開催と例年と比べて遅い時期の開催となり、台風よりも寒さが心配されましたが、当日は暖かい絶好のコンディションの中、第38回大分国際車いすマラソン大会が開催されました。当センターからは渡部好史さん桑田祐助さん中川みかさんの3名の利用者がハーフマラソンの部に参加しました。

渡部さんと桑田さんはT51クラスでの参加です。車いすマラソンにも障害の程度によるクラス分けがあります。T51が最も障害の重いクラスです。お二人とも、怪我をする前はロードバイクに乗っていたこともあり、コースに合わせて上手く走ることの出来る走行感覚は優れており、短い練習期間ながら大きく能力を向上させ大会に臨むことが出来ました。中川さんは、T52というクラスです。ご本人は体力づくりのつもりで車いすマラソンを始めたのですが、私を始め周囲の勧めもあり大会参加することになってしまい、やるべきことが重なった時期で大変な部分も多かったと思います。そのような中でもご本人なりにしっかりと最後まで取り組めたと思います。

結果は、残念ながら3名とも関門通過ならず完走はできませんでした。当センター利用期間も短くなってくる中、日々の日常生活動作訓練をしながら車いすマラソン練習も行うことは、体調管理にもかなりの気をつかわなければならず、大変なことだと思います。ひとつひとつ問題を解決しながら、大きく力をつけた皆さんが無事スタートラインに立てたことは、参加した皆さんの日々のところがけの賜物ではないでしょうか。

最後になりましたが、今回も10名を超えるOBの方が大会に参加していました。センター終了後に車いすマラソンを続けるには、その環境を整えなければならず、多くの問題をクリアしなければなりません。

続けて参加されている皆さんの熱い思いに敬意を表します。来年も大会でお会いしましょう。



第27回文化祭

10月27日(土)に第27回目となる文化祭を開催しました。もはや毎年恒例となった訓練紹介、車いすスポーツ体験、トールペイントや手織り体験、福祉車両紹介及び乗車体験、そして模擬店と企画も盛り沢山の中、多くの方で賑わいました。また、今年は特別企画として、日本文理大学沖縄県人会によるエイサー演舞と地元の古戦場太鼓による太鼓演奏の二本立てで行われ、模擬店で購入した食べ物を飲食しながら多くの方がステージを楽しんでいました。



この文化祭には終了者が数多く来所され、センターのあちこちで利用者や職員と懐かしそうに歓談している風景が見られました。また、普段はセンターに入る機会があまりない地域の方々も熱心に訓練紹介のパネルなどをご覧になり、積極的に各体験などをしていただきました。

秋晴れの中、多くの皆さまのおかげで楽しく盛大に文化祭を開催することができました。運営にご協力いただいた関係者の皆さま、ご来場いただいた皆さまにこの場をお借りしてお礼申し上げます。

蛍の交歓会（答礼訪問）

今年も恒例行事となっている蛍の交歓会（答礼訪問）のため11月8日(木)に竹田市立南部小学校を利用者2名と職員5名で訪問しました。蛍の減少等環境保護の意識も高まる中、こうして蛍の交歓会が継続して開催できたことを、関係者の皆様のご尽力に感謝致します。

当日は南部小学校の児童の皆様と当センターの利用者の交流が楽しく行えました。児童の演奏・合唱には感動を覚え、交流ゲームやボッチャ体験、昼食会では明るく活発な児童との会話に時が経つのを忘れてしまうほどでした。



今年度も南部小学校及び当センターで開催された交歓会を通じて、児童の皆様はよりいっそう障害や環境保護の理解を深められ、利用者は児童の皆様から元気を分けていただき今後のリハビリの励みになったと思われます。

今後もこの交流会が未来永劫受け継がれていくことを切に願います。

診療室より～健康管理について2～

診療室 徳永 ひろ子

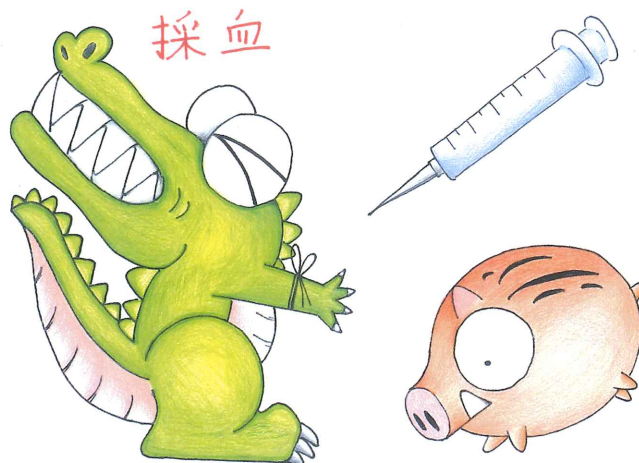
昨年自分の身体を理解して、健康管理を自分で出来るようになりましょうという話をしました。今回は排尿についてお話しします。

腎臓は腰の少し上、両側の背中に位置していて、血液が流れ込んで濾過し全身の老廃物や余分な水分を膀胱に送ります。膀胱は筋肉で出来ているゴム風船のような袋で、溜める作用と出す作用を持っています。しかし脊髄が傷つくと膀胱の機能が十分に果たせなくなります。これを「神経因性膀胱」といいます。

排尿方法はそれぞれの残存機能により異なります。カテーテルを使わないにこしたことはありませんが、自尿が出てても残尿が多ければ尿路感染を起こします。残尿が常に100mlを超える場合はカテーテルを使用します。自身で出来る場合は自己導尿を行います。習得までに時間がかかったり、訓練を重ねても出来なかったりした場合は膀胱瘻をお勧めしています。尿道留置カテーテル法は、長期に渡ると尿路感染症や膀胱結石、尿道裂傷といって尿道が裂けることもあります。膀胱瘻も同じカテーテル留置ですが、尿道が温存されるために尿道留置よりも尿路感染や膀胱結石のリスクが低減します。

どの排尿方法を選択しても、重要なことは「膀胱を過伸展させないこと」「膀胱を空にして尿路感染症を防ぐこと」と「膀胱尿管逆流現象（膀胱内の尿が尿管をさかのぼること）を起こさないこと」です。本来尿管から膀胱へ流れた尿はさかのぼりませんが、脊髄が損傷されることによってそのしくみがうまく働かなくなりなります。そうすると膀胱内の細菌が腎臓にさかのぼって腎盂腎炎を起こし、高熱が出ます。適切な管理が出来ずに腎盂腎炎を繰り返すと腎機能が低下し、腎不全に至ることもあります。

排尿管理で大切なことは、適切な水分をとること、規則正しく生活してカフェインやアルコールの摂りすぎに注意すること、陰部を清潔にすること、尿の性状に気をつけて、いつもと違うと思ったら水分を少し多めに摂ること、などに注意することです。自分で体を守れるようになりましょう。



2018年度 ツインバスケットボール かぼすカップ・九州連盟リーグ戦



ツインバスケットボールクラブは今年度二つの大会に参加しました。

9月22日(土)、23(日)にべっぴアリーナで行われた「大分かぼすカップ」では、太陽の家ブレイカーズ、長崎シャドウナイツと試合をしました。12月8日に太陽の家サンスポーツセンターでは「九州連盟リーグ戦」に参加し、福岡ビート、再戦となる長崎シャドウナイツと戦いました。全試

合で惜しくも勝利できませんでしたが、中には先制点を取る試合や連携の取れたプレーも見られ、練習の成果が実践で活かされていました。

これからも冬の寒さに負けずに活動が続けたいと思います。応援よろしくお願いします。

別府市立南立石小学校児童に対する福祉体験学習について

理学療法士長 浅野 圭司

当センターでは地域交流の一環として近隣の小学校に対して福祉体験学習を実施しています。今回は7月3日に別府市立南立石小学校を理学療法士、作業療法士、運動療法士が訪問し4年生に対し福祉体験学習を行いました。また、10月4日に同小学校の4年生65名と教職員4名の計69人が来所し見学学習を行いました。南立石小学校では総合的な学習の時間に「福祉」をテーマに学習に取り組んでいるそうです。

まず、センター職員が小学校を訪問しての体験学習では、障害者への理解を深めてもらう目的で、①運動療法士による車椅子乗車体験。②理学療法士による車椅子を触ってみる体験。車椅子で介助される・介助する体験。③作業療法士による自助具などの福祉用具使用体験を行いました。

車椅子乗車体験では、車椅子の基本的な操作方法を学んだあと、普段乗る機会の少ない車椅子バスケットボール用車椅子の乗車体験を行いました。車椅子の介助体験では、車椅子の基本構造や折り畳みなどの取り扱いと基本的な介助方法を学んだあと、実際に当事者役と介助者役に分かれて、それぞれ車椅子を使用して段差越えなどの介助方法を体験しました。また、自助具体験では、障害者が失われた上肢機能を補うため、普段どのような自助具を用いて生活しているかを学んだあと、書字具やソックスエイドなどを用いて書字や靴下履きの体験をしました。

また、10月4日のセンター見学では、まず、実際に利用者による体験談のあと質疑応答などで交流を行いました。その後、主に訓練場面を中心にセンター内を見学しました。普段元気な小学生4年生もセンター内の珍しい設備に静かに見入っていました。

今後も地域の皆さんを中心に障害者への理解を深められるような福祉体験学習を継続していければと思います。



作品展

今年度もセンターの手工芸訓練において利用者が制作した作品を展示する作品展の実施や県や市が開催している作品展への参加を行いました。今年度は第33回国民文化祭及び同時開催の第18回全国障害者芸術・文化祭が大分で開催され、これを機に、センターの手工芸訓練においても毎年実施・参加している「大分銀行明野支店ロビー展」「ときめき作品展」に加え、合計で4つの作品展示会の実施や参加を行っています。その甲斐もあって「展示している作品は販売していないのですか？」などの問い合わせもあり、地域の方々からの関心を得ています。



今後も日頃の訓練の成果を発表・展示する機会を少しでも多く持つことで、地域のより多くの方に当センターの存在を知ってもらい障害者に対する理解を求め、また、訓練生の作品制作への意欲向上や終了後の余暇活動や地域参加等に向けた継続の機会に繋がっていきたいです。

障害者週間記念講演開催

12月3日からの障害者週間記念行事の一環として「大分国際車いすマラソン大会通訳ボランティアCan-do」代表 後藤恵子さんをお迎えして「パラスポーツに魅せられて」と題した記念講演をセンター利用者及び職員を対象に12月6日に開催いたしました。

後藤恵子さんは1981年の国際障害者年に大分県で初めて開催され、今や世界的な規模に成長した大分国際車いすマラソン大会の当初から外国人選手の通訳ボランティアとして大会運営に携わってきており、外国人選手にとってはいわば相棒です。

当初は継続を前提とした大会ではなかったということ、競技用車いすを空輸した際には空港でライフル銃と間違えられたこと、初期の大会は競技（タイム）より友情が前面に出ていたこと、テレビ放映では障害程度の軽いクラスの選手にスポットライトがあたっているが、できれば重い障害程度の重いクラスの選手を放映してほしいとの要望をあげたこと、障害に関係なくあらゆることにアクティブな外国人選手の日常生活等々興味深いお話が続きました。競技後のレセプション等競技の裏側にいたることまでお話しいただきました。

今後とも大分国際車いすマラソン大会に別府センターからも多くの出場を期待していますと述べられたとおり、当センターを訓練中に大会に出場し、終了しても毎年この大会に出場している元利用者も多く、今後の活躍への期待感があふれていました。

お忙しい中、貴重な時間を割いてのご講演ありがとうございました。



終了者の状況

(平成30年7月1日～平成30年12月31日)

復帰形態	家庭復帰	就職	自営・内職	現職復帰	就労支援施設 ・能開校	他施設	病院	進学	その他	計
人 数	2	1	0	0	0	5	0	0	1	9
比率(%)	22.2	11.1	0	0	0	55.6	0	0	11.1	100.0

職員異動

平成30年10月31日付

○ 任期満了 医務課介護福祉士 神田 末美

平成30年11月 1日付

○ 復 職 医務課介護福祉士 村上紗弥香

平成31年 1月 1日付

○ 内部異動 医務課理学療法士長 浅野 圭司
医務課主任理学療法士 時枝 陽子



利用者募集のご案内

当センターは、厚生労働省が設置・運営する指定障害者支援施設です。主に頸髄損傷等による重度の肢体不自由の方で、市区町村から「障害福祉サービス受給者証」の交付を受けた方を対象に、社会復帰に向けた支援を行っています。

ご利用できるサービスは以下の通りです。

○自立訓練（機能訓練）

理学療法、作業療法、スポーツ訓練、職能訓練です。

利用期間については、利用開始後の評価に基づき作成した個別支援計画書に定めた期間となります。障害者総合支援法上の標準利用期間は1年6か月間です。（頸髄損傷による四肢の麻痺その他これに類する状態にある方は最大3年間です。）

○施設入所支援

自立訓練（機能訓練）を利用される方で、自宅から通所が困難な方のために、看護・介護等の支援を受けながら宿舍の利用が可能です。

詳細は、次のURLから当センターのホームページをご参照ください。

<http://www.rehab.go.jp/beppu/>

なお、当センターの概要や利用申込み手続き、見学などのお問い合わせについては、下記までご相談ください。

お問い合わせ先

国立障害者リハビリテーションセンター 自立支援局

別府重度障害者センター 支援課

住所 〒874-0904 大分県別府市南荘園町2組

電話 0977-21-0182（利用相談） FAX 0977-21-2794

E-mail soudan-beppu@mhlw.go.jp

頸髄損傷者の自立訓練（機能訓練）については下記の国立障害者リハビリテーションセンターの利用も可能です。

国立障害者リハビリテーションセンター

所在地 〒359-8555 埼玉県所沢市並木4丁目1番地

電話 04-2995-3100（代） FAX 04-2992-4525（直通）